

<http://pansymedia.com>

パンジーメディア

「パンジーの部屋」 浜田寿美男さん

第 1 回～第 3 回放送分

社会福祉法人創思苑

## ①相模原事件から見えてくるもの

宮田：こんにちは。

浜田：こんにちは。

宮田：今日はよろしくお願いします。

浜田：こちらこそよろしくお願いします。

小川：浜田さんは、知的障害を持ってる人とどれぐらいの長さというか、お付き合いがあるんですか？

浜田：元々大学で心理学、とりわけ発達心理学っていう領域をやってきましたので、それ自身から言うともう 50 年。具体的に障害の人の問題を考えるようになったのは 25、6 からだからそれから数えて 45 年ぐらいですか。

小川：あ、そんな長く！

浜田：長いですね。ただまあ直に日常に触れてという機会がそんなにあるわけじゃないので。時々寄せてもらって話をさしてもらってっていうそれぐらいの付き合いですね。現場でやってる人から見ると、外の目で見てる感じになるかもわかりません。

小川：逆にね、そういう外の目で見るとある意味ですごい大事な、と思うんですよ。

浜田：外の視点っていうのは必要で、そういうのでは外と中と出入りできるっていうのはいいことかなって気がしてますけどね。

小川：早速ですけどね、相模原で入所施設で 19 人もの当事者が殺されるというとんでもない事件が起きたわけですけども。浜田さんはあのニュースをご覧になったとき、知ったときに何かお感じになったとか。

浜田：もちろん非常に悲惨な状況が作り出されてしまったわけで、ショックでしたけど、考えてみると起こりうるなって気は後からしましたね。

浜田：人間は観念で動かされてしまう。彼なんかもだから結果的に 19 人の方が亡くなってますけど。たくさんの人を刺してるわけでしょ。普通の神経だとできないですよ。日常の生身のやりとりのなかではほとんどで

きないことですけど、たくさん殺すという観念が彼の中で動いてるんですよね。

小川：障害者は安楽死をとか、そういう観念を。

浜田：生身の付き合いのなかで殺人行為ってなるとせいぜい一人二人、憎い相手をやっつけるって思いでやってしまうんでしょうけど、大量殺人ってそうじゃないんですよね。相手は誰でもいいんですよね。障害者っていうラベル。とりあえず重い障害者。安楽死になって然るべきって思ってしまっただけでその対象を殺してしまう。その観念で動いてるんですよね。生身で動いてない。そういう意味では起こりうるって感じは、結果的ですけどね。

小川：今回の事件をある一人の26歳の男の事件だということで、彼がどういう経歴だったとか大麻やってたとかいろんなこと。でも、なんでそういう人間が生まれてくるのかっていうそのバックグラウンドがどうも語られてないのかなって気がするんです。

浜田：ああいう行動に出してしまうような何か背景を抱えているわけで、そこまでえぐりだすことができればすごく大事なことになると思うんですけど、難しいんですよね。元職員として当事者とどういにかかわりができていたのか、そのなかで彼がどういう思いを持っていたのかっていうこと全然出てきてないわけですけど、だれそれさんとこういう付き合いがあって、私はこういうふうと一緒にやってきたんだっていうなかで殺人行為をしたわけじゃなくて、障害者っていうラベルのもとにいる人を刺してる。だから生身じゃないんですよね。彼にとって。できないとできないと思うんですよ。あれだけの行為を短い時間で。ある意味で非常に機械的にやってるわけですよね。

小川：あれだけ大きい施設で職員も多くいて、そうするとそのなかにね、彼がああいう世界に入っていくなんかあったのかなあというふうに思ったりする。

浜田：重度の人を特に選んでと報道されてますけど、つまりコミュニケーション意思疎通ができない人をやったと言っている。逆に言うと、彼は意思疎通ができなかったんだと思うんですよね。職員時代に。だから物になっちゃってる。障害っていうラベルがついて、世話をしなきゃいけない対象としてそこで自分の仕事としてやってる。どんなに重い人でも、そこんところで意思疎通って言葉でないにしてもあるはずなんです。そこを持ってれば僕は違うんじゃないかと思うんですよね。実際職員としての生活はどうだったのか、これは他の職員もそうで。仕事として自分はやっている。だけど意思疎通が必ずしもできているわけじゃなくて、

そこに喜びを見出しているわけじゃないって職員がいるかもしれない。

小川：そうですね。彼だけじゃなくて、彼だけだったらたぶん目立ってるだろうから、なんかの手を打つってのは早めにあったかもしれない。

浜田：生身で付き合うという感覚を持ちながら仕事ができている、付き合いの歴史が自分のなかである人を殺そうと。なかなかできないことですよ。

小川：もしかしたら誰が悪いということではないんですけれども、ああいう閉鎖されたなかで仕事としてやってればどこかでそういう空気みたいなのがあったのかな、とかね。

宮田：去年大藤園で実際に虐待がありましたから。あった例がすごいその後あれしたっていうのが。他では、前千葉でも療育園で事件、あれ行ったことがありました。あれは寮で蹴られて、殴られて、それは覚えてます。

小川：やっぱり切実な問題ですよ。

浜田：大きい施設でたくさんの障害の人たちがいて、仕事をその思いを持ってやってる、かかわることも実感を持ちながら自分の生きがいとして仕事をやってる人たちもいただろうと思うんです、たくさんね。片方で仕事として、職としてやってると、生身のかかわりが必ずしも意思疎通というのが通じ合っていない人もいた可能性があるし、よく言われてますけど、施設っていう空間そのものがそういう構図を作ってるんですよ。重い障害を持って守られる人、ケアされる人、介護される人、こちらは介護しながらそれを職業として給料をもらう人。それがはっきり分かれてしまう。そういう構図のなかでこういう人たち本当に役立つんだろうか、生きてることの意味があるんだろうかってことを考え始める人がいてもおかしくない。

小川：今回の事件を僕らが見て、もちろん当事者は怖かったりいろいろあるでしょうけど、支援する人、職員であつたりそういう人たちがある意味で他の入所施設だとか他人事で見るっていうわけにはいかないですよ。これの本質というか意味をみんながどれだけ考えるかってことです。

浜田：開かれた施設として地域のなかで馴染んできたというような報道もありましたが、確かにそういう努力はされてきたと思うんです。だけど、施設っていう構図そのものがそれを難しくしてる現実がやっぱりあって、施設を地域に開くってそんな簡単なことじゃない。そういう意味で施設ではなくって町の中につていうことが大事だって話になってくる。

## ②知的障害をもつ人とどう向き合うか

小川：これまで事件の話だったんですけれども、やっぱりあれを見てると、知的障害を持ってる人とどういうふうに向き合ったらいいのかわからないっていうところがあったと思うんですけれども、一般の普通の人たちもたぶん、同じような感想を持つと思うんですよね。そこら辺りはどういうふうに考えたらいいんでしょうかね。

浜田：コミュニケーションって言ったら言葉で向き合ってやりとりする意思疎通するみたいにそこだけとると受け取ってしまうんだけど、コミュニケーションって一緒に何かするから成り立つわけで、面と向かって何かしゃべれって言ってもできるわけないんですよね。そういう意味では生活を共有してるっていうのが基本で。例えば知的障害の人に出会ったことがない人がなかなか難しいかもしれないって、それは当然のことです。生活を一緒にしてないんだから。生活というか、なんでもいいんです。一緒にひとつのことをやろうということになれば、はじめてそこでやりとりごく自然にできる。そういう意味では施設空間というのはすごく難しいところなんで。生活をさせる場所で、職員は面倒を見る立場、利用者はそれを受ける立場。こういうふうになっちゃってるから共有されてないんですね。

小川：一緒に暮らしてるっていう感覚ではないんですね。

浜田：それが一緒に暮らすってことがあってはじめてコミュニケーションが成立しますから。だから、この事件を起こした彼の場合も、職員としてはいたかもしれないですけど、共同の生活者としてはいなかったんじゃないかって、これは推測ですけど、思えてしまう。

小川：なかなか一緒に暮らすということは普通ではできないですよね。そうする場合、たとえば、私が初めて知的障害を持ってる人と出会ったときに、どういうふうな向き合い方をしたらいいんでしょうかね。

浜田：例えば出かけていってお店に行ったときにお店の人が「何が欲しいんですか？」ということで、そこで具体的な物を間に挟んでやりとりができますよね。それと同じことで、暮らしを共有するというふうに言うと、家族しかできないみたいな感じになりますけど。そうでなくて、身近にいる人との間で、この人これをしようとしていて、自分はそれに対して、例えば物を売るんだったらお金のやりとりも物の説明も必要になるかもしれない。そういう場所だからごく自然に。必要がなかったら人はコミュニケーションをしないわけです。生活の場で出会って、顔合わせるだけじゃなくて出会って、何かやりとりができるような共同の中にあると

いう。それが基本だろうと思って。例えば外に出かけて買い物に行けるような状況ができれば周りの地域の人たちもそこで意思疎通ができるわけです。わけわからん人じゃなくて、お客さんの一人として登場する。

小川：かかわりをどう持つか。

浜田：そうですね。ごく自然の日常の1コマをどうやって共有できるか。当たり前のことなんですけど、誰と出会ったってそういうかたちでやりとりがあって初めてコミュニケーションが成立する。電車の中に乗って全然知らない人とコミュニケーションやる必要ないわけですよ。だけど、ごく自然に出会える場面で共通のものをやりとりするってことはいっぱい地域の中にあるわけで。それが、意思疎通というのかコミュニケーションの基本で。構える必要は本当はないんですよ。意思疎通できなきゃいけないとかね。

小川：意思疎通できなきゃいけないとかっていうふうなことではなくて

浜田：どんなふうに通じ合ったらいいでしょうかって、そんなテクニックを知って初めて知的障害の人と出会えるって話じゃ全然ないわけですから。なんかのコミュニケーションの共通のルートを持ってるはずで。重い人でもそういう場面のなかで出会って付き合うとか可能だと思うんですよ。

小川：そうするとですね、知的障害を持ってる人がある地域で暮らすということは、そこら辺りがみなさんがわかってくれれば、どんな人でも地域で暮らすことは可能だっていう。

浜田：そうですね。そうしないと実はコミュニケーション、意思疎通ができないという。一緒に生活抜きにコミュニケーションは意味もないし。

小川：地域で暮らすっていうのは一緒に屋根の下とかそういうだけじゃなくて、地域全体を含めて一緒に暮らすという。そこでコミュニケーションが生まれるっていう。ということは、入所施設の中から地域に移るっていうのはある意味ですごく大きいこと。

浜田：大きいことだと思います。

小川：宮田さんなんかは、今どこ？グループホームでいる？

宮田：はい。

小川：やっぱりグループホームで普通に町に買い物行ったりするでしょう？そういうときに店の人と話したりなんかやりとりはある？コミュニケーションっていうか。

浜田：何買いに行きます？

宮田：お昼やったらおにぎりとか。

浜田：コンビニ？大体。

宮田：はい、コンビニ。

小川：そのときコンビニの人ってどんな感じですか？嫌な感じはしない？

宮田：ちゃんと「ありがとうございます」って。

小川：今さっきお聞きしたように、一緒に暮らすっていうことが、すごくコミュニケーションを取ったりそれが理解を深めたり理解しあう。なんで入所施設じゃだめなの？って言ったときに、単に向き合ってるだけじゃだめなんですね。

浜田：訪問してご挨拶する程度じゃあかんってことなんです。

小川：俺は手助けしてる。当事者はされてる立場。これはたぶん一緒に暮らしてることにはならない。今さっきの一緒に暮らすっていう話からすると、僕は知的障害を持ってる人たちは、どっかに閉じこもったりなんかするんじゃないくて、どんどん町の中に出ていけばいいんだって。どんどん自分たちの姿を恥ずかしいとかそんなんじゃないくてこれでいいんだと、自分は自分らしくこれでいいんだっていうので、逆に地域でどんどん出たほうがいいのかなっていう気がしますね。

浜田：人はいろんな人がいるわけですよね。おじいちゃんもおばあちゃんもいるし、赤ちゃんもいるし、同年代の人もあるし、同姓も異性もいるし、そんなかに障害を持ってる人もいるわけですよね。実際に出会ってやりとりするなかでわかっていく。

### ③文化の違いをこえて

小川：事件の話、それからコミュニケーションをどうするかって話をお聞きしていくと、そのなかで感じたのはもっといろんな多様性というかいろんなものがあるけど、オッケーだよっていう、そんなふうなことなのかなと思ったんですけど。

浜田：自然ですよ、我々自分で選んでこの世の中に生まれてきたわけではなくて与えられた状態で生きてるわけで。自分で左右できない世界に投げ込まれてるわけですよ。生まれたときはもう自分の与えられた条件、こういう人間として生まれたという。これはもう変えようがないことがたくさんあるわけです。誰もがみんなそう。そういう意味では自然は多様なんですね。さまざまなんです。さまざまな状態のなかで生み出されるっていうのがごく当たり前のことで。そのなかでそろえようとする、人間がね、ある制度のなかにはめ込んでこの人は障害を持ってる人、この人は障害を持ってない人、この人はケアを必要としてる老人、高齢者という形でね。分けて、同質同じものを揃えましょう、効率がいいですよっていう発想は、ある意味で非常に不自然なんですよ。できないってのもできるようにしたらいいって話じゃなくて。できないことはできないんだよ。努力したってできないことはあるよ。それはそのまま受け止めて、与えられた条件で自分の形を作っていくっていう、それが文化っていうふうにわたしは思ってるんですよ。

小川：ということはですね、宮田さんには宮田さんの文化ってものがあるわけですね。僕は僕の文化。そうすると、文化がものすごく違ってるという場合、どういうふうにすればいいですか？

浜田：文化は違うんだけど、みんな違うんですよ。文化っていう言葉もね、ある集団の共有してる生きる形を文化と名づけてますので、個人が文化っていうと奇妙に感じるんだけど。あえてそう言ったほうが、例えば個性っていうと個人のものになっちゃうから。そうじゃなくてその人の生きる形があって、それは左右できないものもある。それで違う形のものが出会う。違和感は当然あるわけですね。それはある意味で異文化の接触と考えたほうがいいんじゃないか。僕は全然知らない土地に行ってみたく違う生活様式をしてる人に出会ったときにびっくりする。旅行者として通り過ぎるのではなくてそこで何かやりとりが始まったときにこんなふうにして生きてる人、生きる文化をつくってるんだっていうのが見えることでちょっとずつわかってくる。ハンデ持ってる人たちは確かに与えられた条件の中で、普通の人と同じようにって発想は本当は無理な

ことで。それはある意味で断念が必要になってくるんですね。断念って結構大事な概念だと私は思ってて。自分のある形をある意味引き受けるっていうことですから。

小川：ようするに断念ってのは諦めるってことですね。

浜田：そうそう。諦めってネガティブにとられやすいんですけど実はそうじゃなくて。自分のありのままを引き受けるっていうすごく積極的なことである。そこでごく自然に自分の文化を誇れる。自分の生きる形はこうですよ。出会ったなかで新しい何かに発見もあるし、それは別に自分が普通になるということじゃなくて、違う人間同士でお互い発見がある。おもしろさもそこにあるということだと思うんですよ。

小川：違う文化の人たちと出会ったときにいろんなつながりというか向き合い方があるんですけど。そこで好奇心をどこまで持ってみるのかってすごく違うような気がするんですよ。

浜田：こう見えるのが当たり前でしょっていうところが違った視点、違った形を描いている。見えてくるとおもしろいですよね。単に奇妙な人とかねおかしな人、何をするかわかんない人って形で、まったく外から見るとそう見えるわけですよ。だけどその人と出会ってみると、この人の生きてる世界ってちょっと違うよね、僕らと。その違いが面白くみえてくるってあると思うんですよ。だから自閉症・・・、それこそあれですけど、もう一度自閉症と出会う。

小川：どれですか？

浜田：一番下のやつ。

小川：これね。もう一度・・・

浜田：もう一度自閉症の世界と出会う。もう一度っていうのはなんとも・・・

小川：もう一度というのはどういう意味ですか？

浜田：出会ったつもりでいるけど、ちょっと違うんじゃないかって目でもつかいみましようかってことです。

小川：そっかそっか。自閉症の人と出会っているけれども、もう一度というのはこれまでとは違ってもう一度・・・

浜田：出会ったつもりでいるけれど、たとえば自閉症を持ってる人たちを、障害を持ってるしんどい人としてケアをするっていうだけじゃなくて、日常の世界の中で彼と出会ったときにどういうことが起こるかっていうことをもう一度見直してみましようよっていうそういうメッセージ。

小川：そうすると、新しい発見なり、気がつかなかったことが新しくわかる。



浜田：もう一度っていうなかなか難しいんですけど。出会ってるつもりだけど、違う。ちょっと視点を変えなきゃ見えてこないってのはあるなって思うんですよね。

小川：もう一度自閉症の世界と出会う。これはある意味で普通の人たちだけじゃなくて支援をしてる人たちにとってはすごい大事なこともわかりませんよね。

浜田：こちらの枠、ある意味で当たり前のことだと思ってることがいっぱいあるわけですね。だけどそれは自分にとっては当たり前だけど外からみたらまた違うんですよね。とりわけハンデを持った人たちの世界と照らしあわし、あるいは出会ったときにこちらの当たり前を横に外さないと見えないこともたくさんある。

小川：それは単に発見したり気がついたりすることじゃなくて、浜田さんの生き方とか世界観とかそこらまで影響するのかなって。

浜田：当然します。当然というか変な言い方ですけど、障害を持ってる人たちもそうですし、障害を持ってない人たちだって知ってるようで知らへんわけですよ。今こうやってしゃべって一応通じてるように思ってますけど、やっぱり違う世界を生きてる。小川さんは小川さん、私は私。それはだから個人が違うだけじゃなくて、生きてる状況が違う。

小川：そうすると、じゃあそれを理解してもらうためにどうやって伝えるかっていうのはものすごく大事なことですよね。理解してもらうっていうのは・・・

浜田：理解してもらうためには当たり前を疑ってもらわないといけない。

小川：当たり前じゃないの部分も含めてみんなに見てもらって、伝えるっていうことはすごいやっぱり大事なことです。

浜田：それがコミュニケーションですから。

小川：ということは、宮田さん僕らがやってることはすごく重要なことだよね。

浜田：はい。

小川：では、最後に、今さっき浜田さんの話で出たもう一度自閉症っていうのが実はこの本です。これはもう発売されています？

浜田：ついこないだ出たところです。

小川：一番読んでほしいのはどういう方たちですか。

浜田：それは現場の。実際に自閉症の人たちと出会ってる人たちにもう一度出会ってほしいという意味合いをこめて。

小川：わかりました。みなさん買ってくださいね。